

大人が子どもの実情を知り、考えるきっかけに



三重県知事 鈴木英敬

三重県は、三重県子ども条例に基づいて、平成 24 年 3 月に初めて「みえの子ども白書 2012」を発行しました。この白書は、定期的に子どもの実情を把握するためのもので、子どもや保護者、県民の方へのアンケートの結果から、子どもと大人の関係や、子どもを取り巻く状況を知ることができます。

子ども条例がめざす「子どもが豊かに育つ地域社会づくり」を実現するには、まずは子どもの実情を多くの皆さんに知っていただく必要があります。そこで県は、子ども白書をテーマにした「みえの子ども白書フォーラム」を平成 24 年 12 月に開催いたしました。

佐々木先生の基調講演では、子どもを取り巻く問題とは社会の大人の問題であるという提示があり、子どもたちの発表では、とても元気で気持ちの良い、かつ大人への手厳しい指摘をいただきました。そして、パネルディスカッションではパネリストそれぞれのお立場からさまざまなご意見やご提言をいただきました。

このたび、このフォーラムの内容を子どもに関わる多くの皆さんに知っていただけるよう報告書としてまとめました。

子どもがいきいきと育つ三重県を築くために、大人がどう行動するか、子どもたちの気持ちにどう応えていくかを考えるきっかけにいただけると幸いです。

子どもの声を聞く



共催 三重県PTA連合会会長 安藤大作

ある意味、大人は子どもによって大人にしてもらえる。子どもの声を聞くことによって、改めてハッとして自らを省みる。子どもたちは、正しいか正しくないかは別として、自分の胸の中の本当の気持ちを吐露することで、心がスッキリして晴れやかな表情になる。いつもは子どもたちに「よく学べ」という大人たちが、自分たちの学びに本気になるのは「大人の声」より「子どもの声」であろう。こうして大人も子どももお互いの心を温かく溶かし、また新たな気持ちでお互いの信頼関係を高めていく。このようなコンセプトで「子ども会議の開催」および「発表」という流れが実現いたしました。

私は小学生・中学生・高校生とそれぞれの子ども会議のコーディネーターをさせていただき、子どもたちの本音を引き出してみました。彼ら彼女らの本音は、大人が聞くには厳しい内容のことが多くありました。しかし、彼ら彼女らはまちがいなく家族や学校・地域の大人に感謝をしています。親や先生も地域の方々も大好きでいます。だからこそ、これからは大好きどうしの関係でいるために声を上げました。中には「言えてよかった。自分と同じ気持ちの子が他にもいるのがわかった。自分はとても楽になった。」という子もいました。

今度は子どもたちの一方的な思いだけでなく、子どもと大人のディスカッションで思い込みやわだかまりで溶かしていくことも大切なように感じました。元気があれば何でもできる、一人一人の子どもの心の元気がすべての原点になります。そういう意味で大変有意義な試みでした。ありがとうございました。

パネリストとコーディネーターからのメッセージ

神戸学院大学 教授 佐々木光明さん

子どものいまを受けとめる。

人の心に刻まれる「ジカン」のはやさは、それぞれに違うようです。とりわけ、大人と子どもでは、ずいぶん差があるように思います。大人の時間は、早くなるばかりです。子どもは何を見ても、何かあっても、そのたびに感じたり、感心したり。大人とは違う時間の流れで受けとめます。大人は、つい自分の時間に子どもをあわせようとしがち。せかしたり、それはダメ、これはしてはいけない...。「子どものため」と思ってる時には、ちょっとやそつでは変わらないので、やっかいかも知れませんね(大人問題)。まるごとの自分で感じようとする子ども期は、社会のなかで生きていく力を育む時期だと思います。子どものいまをしっかり受けとめたいですね。子どもは大人のパートナーです。



東京未来大学 准教授 石阪督規さん

今回のフォーラムは、「子どもの気持ち」を発表する場であると同時に、「大人の気持ち」を子どもたちに知ってもらおう場でもあったのではないかと思います。「大人の言うことを聞かせる」子育てはすでに過去のもの。「困難に直面している子どもたちに寄り添い、子どもの自己実現を支援する」子育てへと、考え方が大きく変わりつつある今、まず課題となるのが大人側の理解がそれに追いつけるかという点です。「一人の人間として子どもと向き合う」「常に笑顔と対話をもって接する」・・・親としては、なかなか難しい課題だと思います。これからも、条例や白書の主旨を、親はもちろん、多くの大人たちと理解し合い、共有していくことが求められるでしょう。



みえの子ども白書フォーラム

開催内容